

# Uganda

[ウガンダ]

写真・文＝渋谷敦志（フォトジャーナリスト）

## 学びの明かり

夕日をバックに、屋外でダンスの練習をするウガンダの子どもたち。激しく腰を振る踊りは、チガンダダンスと呼ばれる



寺子屋の給食は、トウモロコシの粉を湯で練ったウガンダの国民食のポシヨ。一日にこの一食しか食べられない子もいる



普段は机を並べて読み書き計算などを学んでいる教室も、放課後になるとたちまちダンスルームに



[右上] 寺子屋から帰宅した後、まきを使う枯れ木を近所で拾い集めるサラ  
[左上] 集めたまきで火をおこし、夕食の支度をする弟のセチムワニ  
[下] サラが祖母と弟と暮らしていた借間。食事にも事欠く毎日で、家賃を5カ月滞納していた

ひときわ小さい女の子が目にとまった。ナマクラ・サラ。当時7歳だった彼女はマラリアのせいで高熱を出し、汗を流しながら、必死に鉛筆の持ち方を練習していた。その姿が気になって、家について行くことにした。

1時間ほど歩くと、道端にポリタンクを持った子どもが立っていた。弟だという。学校に行かず、家事を手伝っている。2人は両親をHIV

／エイズで失った後、祖母に引き取られた。

蚊帳にこぎ、食器が転がる借間。電気も水道もない。祖母は時々採石場で仕事をしているが、「食料が尽きるのが怖い」と嘆いた。弟がまきで火をおこし、サラがお茶を沸かす。それが夕食だ。「砂糖はないけど」と出してくれた紅茶を手にし、言葉を失った。

力強い掛け声と躍動するステップ。驚いた。ウガンダで目にした子どもたちのダンスが、思いのほか本格的だったからだ。

5年前、首都カンパラ近郊の町ナサンナを訪れた。国際NGOあしながウガンダが運営するHIV／エイズ遺児のための寺子屋取材するためだ。そこで、放課後のクラブ活動

のようなものとして始まったのが、このダンスだった。

親を亡くし、貧しさから正規の小学校に通えない約60人が学ぶ寺子屋。「遺児にとって、学校に行くこと自体がチャレンジです」。そう話す担任のティディ先生もHIV／エイズ遺児だった。空腹、病氣、無気力、差別。彼らが戦う相手は多い。



2010年に初めて出会ったころのサラ。小学校低学年のクラスに保育園児がいるのかと思うほど小さかった



ナンサナから望む首都カンパラ。近年は車やバイクの交通量が急激に増え、いつも渋滞がひどい



叔母の洗濯の手伝いをするサラ。この5年で30センチも身長が伸び、病気にもなりにくくなった



水くみは子どもの仕事。1日2、3回も行う重労働だが、水場に集まった子ども同士で遊べる時間でもある



学校に行くサラと叔母の子どもたち。毎朝6時に起床、朝食を食べずに片道1時間半かけて通学する



水くみから帰ってきた後、自宅で算数の復習をするサラ。「もっと学びたい」。彼女にとっては、学び続けられることが最大の喜びだ

教育の一番の敵は貧困。そうティディ先生は言っていた。貧困から脱出するには、教育がカギなんだとも。でも、教育を受けられない子どもはどうすればいいのだろうか。そう思うと、将来の夢なんて簡単に聞けなくなつた。「あのころはいつもおなかがついていて眠れなかった」。そう振り返るサラは、もう11歳。弟と祖母は家賃が払えずに村に帰ったが、サラだけが近所に住んでいた叔母の家に残った。「勉強を続けてほしい」という祖母の願いに応え、正規の小学校への編入を果たした。

炊事洗濯。でも、眠れない夜は少なくなつた。何より勉強が好きだと目を輝かせる。「ジャーナリストになりたい。生活が苦しかったこと、お世話になった人のこと、忘れないうちに文章で書きたい」。いつもおなかをすかせていた女の子が、今では学ぶことに飢えている。それは未来をも照らす明かりだと、サラは気付いたのかもしれない。学びたいという意欲。これより他に意義のある投資先があるならば教えてほしい。ウガンダのエイズ遺児は約200万人。その中に明かりを渴望する子どもたちがまだまだいることを、忘れてはならない。



寺子屋で子どもたちを教えるティディ先生。「親、お金、食料。どれも足りないけれど、一番足りないのは愛情」と話す先生は、みんなの母親のような存在だ

再建が期待される  
世界遺産といえは

## ブガンダ歴代国王の墓



焼失前、ブガンダ歴代国王の墓は観光地としても人気だった（2009年撮影）

首都カンパラの西、カスピの丘にユネスコの世界遺産に登録された「カスピのブガンダ歴代国王の墓」がある。いや、正確にはあったと言うべきだろうか。2010年3月に焼失してしまったからだ。原因は放火とも言われているが、正確には分かっていない。

ブガンダとは、“ガンダ族の国”という意味。ガンダ族はウガンダで最大の人口を占める民族の一つだ。ブガンダ王国はイギリス植民地時代以前にこの地で栄え、ウガンダの独立後に消滅したが、いまだに部族の結び付きは強い。1993年には、政治的な力を持たない文化的なリーダーとして国王が復活し、ガンダ族の人々の心のよりどころになっている。

ブガンダ歴代国王の墓は、わらぶきのドーム型の屋根を持つ独特の形。19世紀にムテサ1世が宮殿として建てたもので、王の死後に墓所となり、1969年に死去したムテサ2世までの4人の王が埋葬されていた。焼失後は危機遺産に登録され、再建が期待されている。



墓の内部には歴代の王の写真や槍などが展示されていた



お土産として売られていたガンダ族の伝統工芸品

地球ギャラリー

## ウガンダの文化を 知ろう！

ウガンダ料理といえは  
主食が満載のワンプレート

### マトケ&牛肉の煮込み

首都カンパラで現地の人でにぎわう食堂に行くと、何やら何種類もの“具”が盛り付けられたお皿がどんと一つ出てくる。実はこれ、おかずはほとんどなく、主食ばかりだ。

ウガンダで典型的な主食の一つはマトケ。日本でよく食べられている黄色のバナナとは違い、皮が青くて甘くない調理用バナナを蒸したりゆでてからつぶして食べる。その味は、まるで味のないきんごんのよう。特に南部で人気の主食だ。

また、雑穀のミレットの粉をそばがきのようにお湯で練って作る茶色いカコ、トウモロコシの粉を使ったポショ、さらにはコメやイモまで一緒に食べることもあり、食卓はまさに炭水化物のオンパレードだ。

こうした主食にかけるとおいしいのが、砕いたピーナツを煮込んで作ったソース。ゆでた青菜とあえると、ゴマあえのようで日本人の口にも合う。おかずには野菜や肉、魚の煮込み料理が多い。どれも味付けは塩だけだったりシンプルで、素材本来の味が楽しめる。



© 渋谷敦志

#### 【RECIPE】

##### ●材料(4人前)

調理用バナナ4本／牛肉400g／タマネギ1個／トマト1個／塩・カレーパウダー少々

- 1 調理用バナナの皮をむき、ゆでたらねっとりとするまでつぶす。
- 2 鍋に油をひき、みじん切りにしたタマネギとトマトを炒め、塩とカレーパウダーで味付けをする。
- 3 ②に一口大に切った牛肉を入れて炒めたら、水を加えて煮込む。
- 4 ①と③を一緒に盛り付けたら出来上がり。

☆調理用バナナは皮のまま炭火で焼いても、ほくほくした食感でおいしい。



カンパラの市場で売られている調理用バナナ